

太田丈太郎著  
 『「ロシア・モダニズム」を生きる  
 日本とロシア，コトバとヒトのネットワーク』  
 成文社，2015年

楯岡求美

厚さ、重さ、扱う情報量、とりわけ登場人物の多さ、いずれにおいても読者を圧倒する書籍である。これほどまで情熱を傾けて各地に眠る資料を追いかけて、まとめあげるほど傾倒できるテーマと出会ったことが、著者にとって天啓であり僥倖であることが熱く伝わってくる。しかし、単に自らの研究の軌跡を克明に記録したエッセイというわけではなく、膨大かつ貴重な資料が具体的なテキストが再録され、書誌も詳細に付されており、本書は今後、20世紀初頭のロシア文化および日ロ交流史を研究するものにとって有用な手がかりを多数与えてくれるだろう。

知られざる発見も多いが、あまりロシアについて知らない読者（ロシア圏に興味を持ち始めた学生も含まれるだろう）でもわかりやすいように、ロシアの一般的なイメージ（プーシキン、ゴーゴリ、ドストエフスキー）を出発点にし、啓蒙的に説き起こしながら、しかし話をたどっていくと、従来のステレオタイプが崩されていく道筋になっている。登場人物は極めて多彩である。著者がそれぞれと出会うたびに新たなグループとの交流の扉が開かれ、さながら筆者が100年前の世界にトリップして冒険する『はてしない物語』のようである。

内容も日本とロシアの二国間交流には限定されない。冒頭でトルベツコイのユーラシア主義が論じられるが、その思想的背景にある空間感覚を、筆者は北方ロシアのモスクワからの単視点的な空間ではなく、シルクロードや中央ユーラシア全域での活発な通商を踏まえた空間的広がりとして、さらには東アジアまで含む、茫漠と広がる、しかし多様なエネルギーに満ちた空間として共有しようとする。

グローバル化が冷戦後の20世紀も末になってようやく起きたかのように考えがちなのは現代人の驕りだ、ということが本書を通してよくわかる。人物や手紙、書物の往来が明確な関心を持って行われ、消費されたという意味では、ロシア革命前後のこの時代の方がよっぽど越境が盛んにおこなわれていたと言ってよい。この時代の文化人たちが未知の文

化から学び取り、社会を変えようと芸術に向き合ったことが、ハルビンを媒介してロシアに学んだ日本—中国の近代化プロセスの平行な関係性の中に描き出される。

「創造の独自性とアイデンティティの相似形の問題が常に付きまってくる」(23 頁) ことの例証として、近代化プロセスを音楽の分野で比較しているのは、一見、思想や文学を扱うテーマから逸脱しているように感じられるが、全体を通底する世界観を提示するためのより説得的なジャンル設定となっている。一般には言葉を介さず、ニュートラルであると考えられている音楽もまた、近代化のプロセスにおいて、国民や民族としてのオリジナリティを求める政治とリンクする。それを示すことで、国境に区切られた一国史ではとらえられないダイナミズムが伺える。芸術もまた政治に、つまりは生活に密接に絡んでいるのである。著者の視点は常に文化の流動性にあり、西欧対ロシア、西欧対アジアという対立図式よりも、有用なものを食欲に呑み込んでハイブリッドな新しい芸術を(=社会)作り出そうとするカーニバル的な時空間を描き出している。後半の鳴海完造とショスタコーヴィチ、ソレルチンスキーとの音楽や文学や酒を交えた、時に狂騒的な交流とも呼応している。

副題にもあるように、本書はネットワークをたどる研究という旅路の記録である。電子化、ネットワーク化され、科学的合理性によって社会の隅々まで秩序立てられているように見える現代社会であるが、電子画面に浮かぶ黒点や極彩色の点の集合体では伝わらないものがある。書かれた書物の厚さや重さという物理的な迫力は、味気ない情報整理よりも感覚的なレトリックが優先される文体とともに、人の温かみに時空間を超えて接したい、と思う著者の熱い思いを読者に直に伝えている。

本書の書かれ方もユニークである。文が短く、歯切れがよく、気風が良い。全体が研究方法を探索する道程ともなっているのだが、本書の読み方指南や読者に直接呼びかける文体等、表現も多彩で、実際に会ってきたかのような描写からは、著者が全力で生きることを寿いで歌う声が聞こえるかのように感じられさえする。畳みかけるようなリズムカルな文章からは、研究対象と読者をつなげたいという強い思いが伝わってくる。第Ⅲ部冒頭の歌舞伎への愛の告白がちょうど幕間といった感じだろうか。テーマの糸口も、「コンラドの新婚旅行」というロマンチックなエピソードが歌舞伎初の海外公演となるソ連公演へとつながっていく。

情報のデジタル化は、読み手の態度の変質を招くとともに、伝達の過程で失われるものが多い。著者はそのことに正面から向き合い、戦っているのだが、その思いは多くのアーカイブ資料、とくに手紙や日記といった私的な手稿に裏打ちされ、文字媒体からその人の声に思いをはせる行為となっている。アーカイブというと、つい私たちは彼の地の、異国にあるアクセスの難しい古文書館を思い浮かべる。もちろん、著者はその困難を克服して島崎藤村や鳴海完造の書簡を発見する。けれども、それと同じぐらい、日本にあるアーカ

イヴの「発見」も重要であることを痛感させられた。日記などの手稿の多くは個人所蔵のものが多いが、東大にも米川（正夫）文庫、黒田（乙吉）文庫がある。それらをデータとしてではなく、彼らのネットワークの痕跡として見る研究もあるはずである。どうしても、在外の欧文資料を重視してしまうのは、いまだに西欧コンプレックスを克服できない我々の病でもあるのかもしれない。

その意味で、鳴海完造の日記から伺われる小山内薫の生き生きとしたソ連体験の様子は小山内研究を変える発見である。著者は、これまで小山内の評価の基礎となってきた秋田雨雀の記録に主観的な歪みがあることを指摘しようとするあまり、秋田に対する評価が厳しいが、秋田が見るものすべてをソ連礼賛につなげる子供っぽさを嘆く鳴海の日記の記述には、かえって当時の少なからぬ日本人のソ連への熱狂が重なって見えて興味深い。また、戦後長らく『桜の園』のラネーフスカヤ役を独占的に演じていた東山千栄子が、若いころにモスクワに居たことがあった、という事実には驚かされた。東山のエッセイ集に書かれていることなので、秘密でもなんでもないはずである。見ないことによる失われたリングが「発見」されることで、いかに日本において「ロシアとの関わり」から目をそらした歴史観が形成されてきたのか、ということにも気づかされる。資料の途中で立ち現れる人名、例えばプロレタリア作家の細井和喜蔵（『工場』）や中西伊之助（『農夫喜平の死』）たちに言及することで、見ないことによっていまや失われつつある日本の歴史を細やかに生き返らせようともしている。

隠されていないのに見えない情報として驚きを覚えたのは、『桜の園』上演に関して「露助になっている役者が一人もない」というロシア通の日本人の感想に、小山内が「そりゃあどうも、為方ありませんよ。まだロシアを見たことのない役者ばかりなんですから」と答えたこと、本当は東山がモスクワに居たことがあることに触れつつ、その彼女も「露助になっていなかった」と書いている（276頁）ことである。東山については、ただ住んでいても、演じることを意識してロシア人を観察していなければ演じられない、と言いたいようだが、日本におけるスタニスラフスキー・システムの受容を考える上で考えさせられるエピソードである。役になりきる、というときにラネーフスカヤの感情に思いを馳せる心理主義的な成り切りではなく、身振りや雰囲気ごとロシア人としてのラネーフスカヤに成ることが求められている。新劇において、西欧ものを上演する際に長らく金髪、付け鼻で演じられていたこと、現在でも、翻訳劇ではなにか身振りがぎこちないことの根っこがここにある。

著者は研究とは歴史のかなたに去った人々の〈いま・ここ〉に遭遇する試みでもあると繰り返し強調する。もちろんネット情報を全面的に排除するというものではなく、ネットに留まらないこと、現実 접촉すること、つまり、過去とつながるために人と直接会うこと、テキスト（手記）を含む物理的な痕跡を探ること、声を聴きとること、それによって

見出した言葉を読者に伝えること。注釈の少ない大胆な長文の文献引用は、著者が過去をよみがえらせる手掛かりを発見した時の興奮をそのまま伝え、ともに過去を覗き見るような臨場感を生んでいる。注の多さそれ自体が複層的なテキストのコスモスを作る。先達への敬意と、後に続き、新たなネットワークを未来に形成するだろう仲間へのエールが伝わってくる。

惜しむらくは、ロシア側のネットワークの要であったと指摘しながら、ヴォークス（BOKC 全ソ対外文化連絡協会）の活動内容についてあまり触れていないことである。協会主催でモスクワの「日本文学の夕べ」も開催された。その夕べについての詳細な紹介があり、読者にどんな組織なのか興味を持たせる。ヴォークスにはソ連側の科学、芸術、教育、スポーツなど様々なジャンルの活動家が参加し、西欧のパートナーもアインシュタイン、ロマン・ロラン、マリー・キュリー、バーナード・ショウなど多彩だったようで、日本からと同様、多くの文化人、著名人がソ連を訪れる際の窓口となっていた。現在の感覚でつい歴史を見返してしまうと、ソ連は当初から鉄のカーテンで仕切られた往来のない国だったかのように思ってしまうがちだが、本書はそのイメージを見事に砕く。しかし、本書でもしばしば触れられているように、20年代には逮捕・粛清がすでに始まっていたし、戦争に向かって締め付けは増すばかりの時代であった。ヴォークス会長だったカーメネフも、日本の夕べの後、元夫のカーメネフの逮捕によって活動の場を失っていく。当時の声を現代によみがえらせるのと同時に、後世から振り返ってみた時に何が見えてくるのか、著者なりの俯瞰図が最後に添えられていたら、と思うのは、欲張り過ぎだろうか。